
魔女の見習い

アリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の見習い

【Nコード】

N8020Y

【作者名】

アリス

【あらすじ】

13歳のキャサリン・ストリートは、魔女の見習いをするようになる。

プロローグ

「みたまえ」

低く、堂々とした少女の声が聞こえる。

「まだ未成年だ。おそらく13歳だろう。魔女にとってはラッキーな数字」

「しかし……」

ここはどこ？あたしは戸惑いながらまだ目を開けられずにいた。

「わたしはそんなに残酷ではないのだよ、アデルバート」

「……どうなさるおつもりなのか」

「それはわたしがこれから決めることだ」

「……わかりました」

「それでいい」

コツコツと軽い足どり、しかしゆっくりとした感じであたしの近くに誰かがきた。たぶん、さっきの少女だろう。

「さあ、目はもう覚めているだろう」

少女が指をパチンと鳴らすと、突然あたしの身体が宙に浮いた。

「きゃっ」

びっくりして声がでる。はじめてその少女の顔を見る。

「お前の名は」

まだシヨック状態でとても質問には答えられそうになかった。少女もそれに気づいたのか、ゆっくりとあたしを地面に降ろした。

腕組みをし、指でトントンと腕をたたいてあたしの返事を待っている。

「キャ……キャサリン。キャサリン……ストリートです」

自分の普段の声とは程遠い、変な声がでた。でも少女はすこし満足したような……感心したような顔をした。そのおかげで少しだけシヨック状態から解放される。

「キャサリン。君は両親はいるかね」

これがあたしとそのひと……のちに魔女だと確信するひとの出会い
だった。

1 傷ついた少女

父親は家をでていったきり帰ってこない。母親は、まだ12歳の一人娘につらくあたるばかりだった。

「いいかげん泣くのはやめな！さあはやく洗濯ッ！掃除だって皿洗いだってまだじゃないか！」

それが母親が、父親がでていった次の日に言った言葉だ。慰めもしないで、自分は酒ばかり飲み、娘が仕事をさぼらないように見張っているだけだった。

この12歳の娘……名前はキャサリンというのだが、心優しく、近所のひとにも人気があった。そこそこかわいらしかったし、体も丈夫で、風邪をひくことはめったになかった。

父親がでていったことがよほどショックだったのか、母親の娘に対する態度は、どんどん悪くなっていき、ついには暴力までふるうようになった。料理をはやくださないと殴り、自分が転んだのは娘のせいだと蹴った。キャサリンは毎日耐え、笑うこともなくなつて、泣くこともなくなつた。近所のひとたちはそんなかわいそうな様子をすぐに察し、母親を説得しようとしたり、それがだめなら少しでも12歳の少女の役に立とうと、慰めとなろうと、優しく話しかけてあげたり、最近あつたおもしろい出来事を教えたり、あるものは喜ばそうと思ってお笑いもやった。しかし、キャサリンは愛想笑いをするだけで、心の底から笑顔になることはない。その様子はどうも弱弱しく、ぼろぼろだった。とうとう誰かがキャサリンを母親のかわりに育てようという話もだが、それをとめたのはキャサリン自身だった。母親はショックがおさまらないだけだから、しょうがない。自分までいなくなったら、さらに悲しむだろうというのが少女の意見だった。みんなは渋々頷き、少女は毎日を頑張つて耐えた。

「もう薪が全くないじゃないか。もうすぐ冬が来るっていうのに。」

どうしてくれるんだい。はやく薪をとってきておくれ!!」

あるとても寒い日の朝に母親にそういうわれ、キャサリンはぼろぼろでつんつるてんのコートを着た。

「そういえばお前、」

呼び止められ、振り返る。目には恐怖がうつっている。「なあに、お母さん」

「最近近所のひとたちに迷惑かけてるっていうじゃないか。これ以上迷惑はかけるな。話しかけたりするんじゃないよ。迷惑なんだからね。森にいつて、さっさと薪をとっておいで!」

「でもお母さん、薪はウィリアムさんのところで買えるわ」

「迷惑だといってんだろ! はやくいきな!!」

なにかを売ることとで商売をしているんだから、迷惑にはならないんじゃないかと思っただが、逆らえばまたぶたれる。薪を買うお金だつてないんだ。もしかしたら親切なひとが少し分けてくれるかもしれないけれど、それがばれたらまたぶたれる。

隙間風がはいってくる家をでて、森につづく道を歩いた。薪といつても、斧を買うことも母親に許されないのだから、太めの小枝をさがすしかない。落ち葉だらけの道。それは赤や黄色などのきれいな色ではなく、茶色の、ばりばりとした道だった。

森に入る前に、一度だけ家のある方向をみる。それからまた森のなかへと進む。暗く、心細い。でも、母親がいないだけいい場所に見える。さあ拾い始めようとしたところで遠くに、屋敷のような建物がたっていることに気づいた。

「変だわ。ここに屋敷なんてあったかしら」

突然現れたようだった。ゆっくりと近づいていく。ダメだ、はやく枝をひろって家に帰らないと、怒られると頭のすみで警告のサイレンが鳴り響く。だけど、それ以上に好奇心のほうが強かった。泣くことも笑うこともなくなった少女にとって、めずらしいことだ。

かさかさいう落ち葉の上を歩きながら、その屋敷をみつめる。木の枝が目にはいらぬように手で守りながら、歩いていった。とうと

う手が屋敷の壁につくと、好奇心が消えて今度は不安という感情でいっぱいになる。なかには、誰かが住んでいるのかしら。ふとそんな考えがよぎる。もちろん住んでいるはず。だって、ついこの間まではなかったもの……。引き込まれるようにドアへ近づく。扉にさわり、一瞬迷い……。ノックした。軽く、二回。

ギギギギギギギ……。大きな、少女の背丈の二倍はある扉がゆっくりと開いた。息をのみ、その場にかたまる。

……五分もそうしていただろうか。ため息をつく。それでもなにもし起きない、誰も来ないので、一步、また一步と屋敷の中へ進んだ。と、後ろでボタンと扉が閉まる音がし、驚いて後ろを振り返った。しかし、もう扉は完全にしまっていて、いくらひっぱってもおしても外には出られなかった。恐怖を焦りが頭の中でぐるぐるする。さつき、中にはいるのはやめておけばよかったのに！！

「誰だッ」

若い男の声……。自分よりも2・3歳年上の少年が姿を現した。しかも、突然。どこから現れたかもわからない。

「きゃっ」

次の瞬間、首の後ろがひやっとしたかと思うと、力がぬけて倒れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8020y/>

魔女の見習い

2011年11月24日20時53分発行